

晴美時代の文学

「夜の会話」を読む

竹内 紀子

はじめに

「夜の会話」は「週刊文春」に一九六六年十一月から翌年の九月まで、ほぼ一年間連載された。この期間中は、自伝小説「いずこより」（主婦の友）、新聞小説「彼女の夫たち」（学芸通信）から配信、新聞小説「祇園女御」（新聞三社連合）、「情婦たち」（小説新潮）と連載をかけもちし、毎月のように月刊雑誌に短編を発表している。信じられないような執筆量である。

この頃のことを『私解説』（二〇二二年新潮社刊）の中で、書いている。

純文学コンプレックスをいつからか持ちはじめていた私は、文芸誌に書くというだけで、妙に肩肘張った姿勢をとっ

てしまう。

それが中間小説だと思ってペンを取ると、不思議にのびのびとして、魂まで解放されるようで、ペンがすべり出すのだった。イメージが拡がり、話の筋が面白いようにのびてゆく。中間小説は読者に喜ばれるか失望されるだけで、批評家の批評の対象にはならない。

四十三、四歳という私の身体も頭も健康そのもので、多作に堪えられた。

中略

エッセイ「極楽トンボの記」を「新潮」（六七年九月号）に書き、自分のこれまでの小説家としての生き方を総括している。その中で私は自分の中間小説の多作さを弁明して、

男の作家がゴルフやマージャンや、飲酒や、女遊びをして
氣を抜く時、それが軀に悪いと止められても止められない
ように、私は「何か書くこと」がやめられないほど好きな
ので、男の作家のような楽しみが好きでない私は、自分の
一番好きな「書くこと」によって自分を慰めていると告白
している。世の中に「アル中」があるように、私は「書き
中」になっているのだらうと自嘲している。

そして、この作品の連載を終えると、翌年からは純文学雑誌
に主に書くようにシフトしていくのである。

この「夜の会話」連載時、瀬戸内晴美（出家前の名）は四四
歳〜四五歳であった。「書き中」の終わり頃である。私生活では、
その男の存在が、常に晴美に文学上の転機を与えた「涼太」と
決定的に別れたときである。その年の四月には井上光晴との出
会いがあった。しかしまだ井上の存在はさほど大きくはなく、
それよりも「涼太」が晴美の娘の年齢ほどの女性と結婚するた
め、晴美と別れたことが、大きな痛手となっていたときである。
中野の家で男と暮らしながら、仕事一辺倒で度々徹夜もし、心
は男と離れながらも生活を続けていた。しかし、いざ男が出て
行ったときは、心に傷が残ったはずである。これを契機に、京

都に家を買うことを勧められ、京都での暮らしが始まる。しか
し、少し経つと仕事上不便であることに気づき、以前に暮らし
ていた目白台アパートを仕事場として、京都との二拠点生活と
なった。

登場人物の設定

「夜の会話」は、中年の作家野中里子と、旧友である大学教
授鳥飼笙一郎、舞踊家の青柳紫野、里子のかつての恋人三木銃
三、新しい恋人藤倉保、若い世代として紫野の娘、亮子と、そ
の恋人英一が主要人物として、からみあいながら進行する。

主人公野中里子は離婚経験があり、夫との間に生まれた男の
子は病死している。元夫は北京で外務省に勤め、敗戦で引き揚
げた後離婚し、里子は作家になった。晴美とほぼ同じ設定で、
分身でもあるかのようなものである。中間小説において、ここまで
自分自身と似た設定の登場人物は珍しい。この作品の中には晴
美時代の作者の考えや生活スタイルが多分に投影されている。

珍しい「北京時代」の回想

また作者自身が結婚して三年あまりを過ごした北京を出すこ
とも稀である。同時期に自伝小説「いざこより」を執筆してい

て、北京のことを思い出して書くことが多かったせいもあるだろう。

そして、北京で知り合ったチベット研究者をモデルにして、この小説では登場させている。鳥飼笙一郎という洛陽大学の教授で、一年に一回ほど会って食事をする間柄。専門はチベット学で、一年の大半を研究室で過ごしている地味な学者である。

この学者のもとに、東京の舞踊家の女性が、新しい舞踊の振付のために、彼の歴史論文の一部を使いたいと訪ねてくる。それはチベットの古代史の中のエピソードで、政略結婚のため、チベットの七歳の王子に二十一歳の則天武后の孫の娘が降嫁する話である。

このチベットに伝わる話は晴美自身が「吐蕃王妃記」として同人誌「Z」（一九五六年三月）に小説として発表している。晴美が北京で暮らしていたころ、同じアパートで暮らしていた外務省留学生でチベットの研究をしていた青年から聞いた話をもとにしたと考えられる。余談ではあるが、この後、この青年は京都大学の教授となり、長く交流し、彼の死後は、彼が暮らしていた京都の町家を遺言により作者が受け取ることになり、大幅な改装ののち、各種の研究会の場所として貸していた。彼が、作者の小説のモデルとして登場するのはこの「夜の会話」だけ

である。作者自身が、そのチベットの昔のエピソードに興味を抱き、小説にした「吐蕃王妃記」に愛着を感じていたため、この小説の中に登場させたのであろう。

対極の女性像

作品中の舞踊家の女性、青柳紫野は、地味で目立たないなりをしていても「七彩の大きな花束が、どさっとそこに投げこまれたのを見たような感じをうけた」と笙一郎に思わせる華やかで美しい女性であった。女を絵にかいたような、性格も姿態も女性性の極致であるかのような描き方をされる。夫との不幸な関係からノイローゼに陥り、性の魔窟に墜ち、身を滅ぼしていく女性でもあった。心が飢え、必死にひもじさを充たすものをもとめ、さまよい歩いていた。家という枠から出られず、自分で人生を選択できないまま、不幸な結末を招いてしまう。作品中に重い比重を占め、暗く救いようのない読後感を残す。

こういう虚無的になり、人生に絶望したような女性が作者の身の周りにいたのかとも思われるが、作者自身もつらい思いをして自殺未遂を起こしたことがあることを考えれば、作者である晴美もそういう女性性を多分に所有しているということである。

主人公の野中里子は自立し、ドライでてきばきとした女性として描かれるが、作者が両面を持つているということであろう。青柳紫野に二人の娘がいて、姉娘、亮子は新しい考え方をもち、次の時代を生きる女性として描かれる。紫野の母親、菊は京都に暮らし、元芸妓で、個性的な人生哲学をもつ女性で、孫娘にもユニークなアドバイスをする。

仕事と恋愛

里子の過去の恋の相手として、妻子ある挿絵画家、三木銑三。雑誌社の企画で知り合い、親しくなった。里子は「結婚生活には魅力を感じなくなっている、男のいない生活は考えられなかった。仕事をしていく上にも、男との時間をもたないと、心の中に詩魂も涸れてしまいそうでこわかった」と考える女性である。ある日、銑三の背後の生活を知りたいという自分の好奇心に気づき、愕然となる。男を愛しすぎてはならないという自分に課したタブーが破られかけているかも知れないと気づき始めた頃、女からの電話があった。三木の妻であると名乗りながら、それは別の愛人の嫉妬にかられた電話であったことが後にわかる。その愛人が自死し、銑三とも別れる。里子は半年ほどヨーロッパを旅した。里子が帰ると、銑三は故郷の四国の片田

舎にひきこもっていた。神経症の病気になった妻のため、思い切った決断をしたと思うと、妻への愛情の度合いに、里子はまたこれまで以上のショックを受けた。

知り合った頃の銑三は、憐れむように里子を見て言った。

「馬車馬のように働いて、何になるんだね、人生というところは、花園も湖も、公園もあるんじゃないか。そういうところに入っていくともしないで、フルスピードで埃っぽい道をつつ走っているという感じが里子の生き方だよ。そんな駆けつぶりの中では、いい作品は生れやしない」

そしてこうも言った。

「おれが邪魔をしてやるのが、里子の場合は、休ませることになるんだ。いつか、おれに奪われた時間の効力に、里子だつてきづくことがあるさ」

気にかける相手がいなくなると、里子は生きるはりがなくなり、むなしさに襲われる。

自分の仕事などいったところで、才能の限界は、誰よりも自分が一番よく知っているのだ。せめて、生きている間に、自分の中の才能の可能性を、とことんみきわめてみたなど、大それた望みを抱いたこと自体が、自分の不幸の

はじまりだったのだろうか。

晴美自身は、よく「人間は死ぬまで、自分の可能性に夢をかけて、それを掘り下げていく情熱を失ってはならない」と人にも期待をこめて語っている。時には、自分自身が困難にぶちあたり、自問自答することもあったのだろう。

銃三と別れたあと、藤倉との関わりが生まれた。藤倉保は里子より三つか四つ年下だが、いつでも会うと自分が十歳も年上のような口をきいて里子をからかったり、たしなめたりする男で、翻訳家であった。評論も書き、辛辣な筆勢で、里子に面と向かうと悪口雑言をいうが、里子は一向に腹が立たなかった。この藤倉は井上光晴をモデルにしているところが窺える。

ある日藤倉が提案する。

「友だちのつくっているアパートがあと五カ月で出来上るんだよ。今なら、好きな部屋を好きなように作ってやるっていつてるんだ。どうだい、いいかないかい」

「どういう意味？」

「うん、いっしょに住んでもいいし、何ならひとつずつ部屋を持つってこと」

里子は夢にも考えてみたこともなかったが、

「あなたを好きだから……好きになってしまったらしいから、距離を置いておいた方が長つづきすると思うの」

と断る。藤倉と共に暮らす生活に誘惑を感じるが、もう男とも暮らし、自分を撓めて男に尽くしきれぬ女ではなくなっているのを、誰よりも知っている。

ここで作者の思いが顔を出す。

男を欲しいが身内の火をかきたてる残りの歳月の重みが肩に感じられてくる。しかしその火が消える時、自分の物を書く情熱の火も消え果てるのではないかという稚い不安が里子を捕えてくる。

おだやかな老年を迎え、子や孫に囲まれて尚、時々、可もなく不可もない型通りの大作を発表する老いた女流作家の傍が里子の目をかすめる。と、その傍を追いかけるように、華やかに身辺をかぎりながら、男たちのすべてに去られ、もう何年も、作品らしい作品を書かず、過去の名声だけに飾られて老年を迎えている女流作家の若づくりの顔が浮んでくる。

そのどちらにも里子はなりたくないと思った。

望めるならば、紫野のように、女の火が燃えくるめいて

いる最中に、書きたい仕事の夢の虹につつまれたまま、急逝したいものだと思う。

自分の作家としての願いであろう。現状に満足せず、次々に新しい作品を生み出そうとする晴美の姿勢である。「烈しい生と美しい死を」という言葉が好きな作者の偽らぬ心情であらう。家庭を持って書き続ける方法も、うわべが華やかな独身を貫く作家のスタイルも、自分の願うものではないということである。そして、いつまでも男と暮らす気持もないということであった。

藤倉への想いは

もう見馴れ、愛撫しなれた藤倉の衿あしが、今も里子には好もしさをかきたてて目に映ってきた。この衿あしを後ろから見つめ、永久に見送る瞬間の辛さと淋しさが錐をもみこむような痛さで里子の胸を刺してきた。しかし、それに自分は耐えるだろうと思った。

と綴られる。この文章は、作者が二年後に発表した随筆「放浪について」（「随筆サンケイ」一九六九年五月号）の一節を思い出

させる。

出家遁世と放浪は、いまや私のもっとも深い憧れとなつて日夜、心をそのかしくる。現在の私は、家はあつても家庭はなく、肉親で私の袖を引きとめる人間もない。しかし、心に繋がる別れがたく断ちがたい愛欲の絆はないこともない。この絆に未練があつて、思うままの憧れの遂行ができないでいるものの、その絆の強さゆえに、また、放浪への憧れも日々強力になりまざる。

出家への想い

この「夜の会話」の中で「出家」につながる感懐を感じさせる場面がある。

里子は奄美大島での講演のあと、近くの鬼界島にひとり立ち寄つた。故郷の小学校の先輩にあたる恒次が学徒出陣で特攻隊員となり、この島から飛び立ち、帰らなかつたという話を聞いていて、いつかはその島を訪ねたいと思っていたのだ。

恒次とは女子大に入って間もなく、お茶の水の坂道の上でばつたり出会い、近くの喫茶店に入り、一時間を過ごした。一カ月に一、二度会う程度で、恒次は学徒出陣となり、別れを告

げに来了。最後に痛いほど恒次は手を握り、別れて行った。その翌年、里子は婚約し、その後、恒次が戦死したことを知ったのだ。

その夜、里子は鬼界島で星を眺めた。

空は、まるで大きな丸天井をふせたように無限の拡がりを見せて、海を島も抱きつつんでいるように見える。

そのまろい夜空は濃紺のピロードを張ったように艶めいて見え、びつくりするほど明らかな無数の星座が、そこにちりばめられていた。

里子は、島に来てはじめて、涙がこみあげてくるのを感じた。

やはりそこにも白い砂をしきつめたように見える空き地の上のまばらな草の上に腰をおろし、里子は銀河や星座のめくるめくような空を見上げつつづけていた。

ひとりの玉木恒次だけでなく、里子の見知らぬ無数の若者たちの魂が、それらの星のひとつひとつに宿って囁きかけているような気がしてくる。

里子は、恒次たちの奪われた青春を惜しまずにいられないと同時に、自分の中から永久にとり落してしまった何か

について考えずにはいらなかった。

恒次の識らない今の里子の軀に刻みこまれた数々の肉の記憶、男の匂い、それらのむなしさが、この豪華な星空の下では実にはかなく感じられる。

めったに見られない静かな星空の下で、里子はひとりで考える。悠久の自然の下では、どれほど自分の存在や、自分の愛と性とはかなく思えたことだろう。「自分の中から永久にとり落してしまった何か」とは何であろうか。純粹に人を愛し、家庭をもち、人を育てていくというおだやかな人間らしい暮らしだろうか。

この星空の下では、自分の今の生活はどこかむなしく思えたのではないだろうか。戦争を経て、自分の才能を試そうとがむしやらに仕事をしてきたが、満足を得られなかったのではないか。恒次のような若い命を散らした同世代の男たちを思うにつけ、彼らに対して恥ずかしくない、納得のいく充実した生活ができているだろうか、ふと思ったのではないだろうか。

今の生活ではない、「出家」するという新しい生き方が常にこの時期、頭の片隅を占めていたのであろう。

作者自身は、このころキリスト教の神父が自宅に来てくれ、

共に聖書を読んでいた時期であった。遠藤周作から紹介された優秀な神父であったが、長くは続かなかった。「出家したい」という気持はあり、キリスト教でもよかったと書いている。どこかしっくりこないものがキリスト教にはあったのかも知れない。

後に、『場所』（二〇〇一年新潮社刊）ではこう書いている。

その時、私はすでに世外への旅立ちの憧れが、心に醸されかかっていたのだろうと思う。その時点でそれが果たせなかったのは、現実のあまりにも形而下的な人間臭い煩惱のまろもろに足を掬われていたためで、たちまち歳月が過ぎていった。

神父に聖書を読んでもらったことで、自分がやはり仏教的風土に生れ育ち、意識からも生活環境からも、それが抜きがたいことにあらためて気がついた。

おわりに

この作品の「文庫解説」を文芸評論家の秋山駿（一九三〇～二〇一三）が執筆している。著者が「秋山さんほど、私の多作な作品のほとんどすべてに、目を通してくれた人はいないだろ

う」（「私のすべての小説を読んでもくれた恩人」「新潮」二〇一三年十二月号）と追悼文で感謝している人である。

秋山氏は、作者が週刊誌小説と、純文学的な小説を区別するが、女の情の或る場面においては

この作者がエッセイで考察し、私小説で書くよりも、むしろこの週刊誌小説の方が、深く考えられ、あるいは微妙に描かれているという印象がある。いわば、むしろこちらの方にこそ、女の情を見るときの「かげり」がある。それは、つまり、瀬戸内氏が、こういう週刊誌小説においてこそ、一層自由にのびのびと、探究のための一種の実験を試みているからであろう、と私は思う。

と述べている。自由にストーリーを展開させ、登場人物たちがのびのびと動くのは作者が中間小説と呼ぶジャンルであり、多くの読者を獲得している。作者が評価しない小説群も、作者の思想や独特の感性があらわれているものは今後残されていくべきである。折りにふれ、紹介していきたい。